
王と呼ばれて

ピヨスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王と呼ばれて

【Nコード】

N1171F

【作者名】

ピヨスケ

【あらすじ】

買い物に行くはずが獣に追いかけて。あげくには主だの王だのと呼ばれる始末。異界に渡った少年と、それを取り巻く出来事。シリ阿斯・コメディ半々な異世界ファンタジーを是非どうぞ。

第一話

見渡す限りの緑。

生い茂る木々はまさに植物と獣の楽園であり、同時に侵入者を拒んでいるかの

様に、その身を大地に根付かせていた。

そんな樹海を必死で走っている人影が一つ。

その背後からは目の赤い、狼と呼ぶには大きく、虎と呼ぶにはやや小さい獣が

3匹。口からは涎を垂らし、牙をむき出しにしながら、前を走る人間を頭から喰らおうと四肢を動かしている。

「なんだってんだ！ここはどこなんだ！どこに行けば良いんだ！ちくしょう！

待て待て待て。その前に後ろの奴らをなんとかしねえと！ってかどうすりゃいいんだよ！」

息を切らせながらも文句を垂れ流し、懸命に走っているその人間の風貌と

言えば、襟のついた半袖のシャツにジーンズ、足にはスニーカー、とまるで「ちよつとそこまで」という簡単な服装である。

髪は短めで黒一色で、目はブラウンがかっているものの、典型的な日本人の風貌だ。

「よし、落ち着けよ俺。まずは現状把握だ。俺は今日、卓也の奴とCDを探す為に

家を出て、裏道を通ってる時に頭痛がして、気がいたら周りは木ばかりで……

って、意味がわかんねえよ！！なんだってんだ！ちくしょう！」
必死で走ってる割には、結構なループっぷりである。

しかし後ろからは3匹の狼の様な獣。

このスピードだったらあと数十秒もあれば追いつかれて

綺麗に食べ尽くされる事は、簡単に予想が出来た。

「こんな所で得体の知れない奴らに食われるなんて、本気で勘弁だ。つっても戦っても絶対に負けるだろうし……どうすれば……っ!？」
またもループしかけた時、進行方向に何かが立っているのを見つけた。

いくつかの影。小さい物や大きい物がざつと5つ程。

その中には自分と同じ人の様な形もあり、一気に安堵の感情が生まれる。

「た……助かったかも……神様っ……!」

そして一瞬の喜びも束の間。

一つの影がこちらに向かってくるのを確認した後、彼は
神を恨む事になる。

「と……虎あ!？」

第二話

後ろには狼（？）、前には虎。

完全に逃げ場を失い、食べられるだけの我が身を呪うしかなかった。

（無理だ……ここで死ぬんだな、俺……）

そんな事を考え、覚悟を決めて前を見ると虎は咆哮を上げながら、目の前に迫っていた。

（ごめんっ！みんなっ……！）

思わず目を瞑る。

しかし来ると思っていた衝撃はいつまでも来ない。

代わりに聞こえてきたのは、おそらく後ろから追いかけて来た獣たちの断末魔の叫びだった。

（……え？なんで？意味がわから……）

おそろおそろ目を開け、後ろを振り返るとそこには3匹の獣の死体と、その横で目を光らせる虎が一頭。

訳が分からずぱかんとしていると、不意に虎が口を開いた。

「災難でしたな、主殿」

それはそれは流暢な日本語が出てきた。

「……………あ……あは、あははは、うははははははは！」

喋った！虎が喋った！！よーっし！分かったぞ！これは夢って事だな！

間違いない！虎が喋ったからな！！」

人間本当に追いつめられると、なぜか笑ってしまうものである。

この少年も例外ではなかった。

「む、なにか楽しい事でも？もしや、こいつらに追いかけてい

たのも

修行の一環でありましたか？我は邪魔をしてしまいましたかな？」

虎の口からは更に流暢な言葉が紡がれる。

しかも我^{われ}と来た。

「くっそう、こんな良く出来た夢を見れるなんて……どんな特技だ
ってんだよ……」

「主殿が何を言ってるのか、我には良く分からぬが……夢ではあり
ませんぞ？」

「うるせえ！夢なの！こーれーはーゆーめー!!」

先ほどのループに続き、見事な現実逃避っぷりだった。

この少年がもう少し冷静であつたなら。いや、逆に冷静になれる状
況では

なかった。獣に追いかけられ、虎に助けられ、あまつさえ虎と会話
をしている。

それを夢と思わずにいられる方がおかしい位なのだから。

そんな現実逃避をしている少年を不思議そうに眺めながら、虎はそ
の後ろに目を向ける。

「おお、皆。主殿は無事だぞ。とは言っても何やらブツブツ言っ
ているが……」

（皆？……って事は俺の後ろには……）

振り返った少年は更なる現実逃避をするはめになる。

第三話

「おー、無事だったか」

呑気な女性の声に思わず振り返る。

そこには20歳前半くらいだろうが、女性にしては大柄な褐色の肌をした人間がいた。

長い赤毛を後ろで一つに縛り、体は軽装の鎧の様な物で飾られており、

その瞳は髪と同じく燃える様な赤色だった。

鼻筋が通っており唇の形も良い。もう少し小柄であれば10人中8人程は

振り返りそうな女性だ。

ただし、その頭に乗ったものと腰から出ているものを除けば、だが。そう、女性の頭には狐や狼などについてる耳、そして腰からは毛並みの良い

尻尾がふさふさと揺れていたのである。

「セリス、口の聞き方に気をつけよ。主殿に失礼だ」

「あ？別にいいじゃんかよー。まだコイツに決まった訳じゃねえんだし」

セリスと呼ばれた女性は悪い事など全くない、と言いたげな顔で口を尖らせる。

「大体なー、シロは細けえんだよ。いちいち。あんま気にしてっと毛が無くなるぞ？」

「なっ……！我のこの毛並みの美しさは、あのお方から与えられた物ぞ！おぬしはあのお方を

愚弄するか！」

「あー、うつせうつせ。そういう所が細けえつつつてんだよ。未だに義理堅いこって」

「まだ言うか！大体シロという呼び方も気にいらんのだ！我にはビヤクヤという名前が……」

「ほい、この話は終わり。とりあえずコイツを連れていこうぜ。リアーナも待つてる事だしな。」

おい、おま……えーつと名前は？」

目の前にある現実を受け入れられず、セリスとビヤクヤの言い合いをただ見つめるしかなかった少年だが、セリスに尋ねられた事で意識を取り戻した様だった。

「あ……えと、優です。わかりますか？ユ・ウ」

「あんま馬鹿にすんな。よっしゃ、優。着いてこい」

「へ？なんで……いや、そもそもアンタらは何者なんだ？なんで虎が喋る？」

人間なのに尻尾が生えてる？そもそも、ここはどこなんだ？」

ついさつきまで夢だと割り切っていたのだが、ここまでリアルだといよいよ

現実だと受け止めざるをえない。

そう思った途端、疑問を解消しておきたくなった優は続けざまにセリスへと

質問を投げかける。

「あーあーあー、とりあえず着いてこい。話は後でゆっくりとな？後ろに転がってる様な奴らの胃袋に収まりてえってんなら別だけだな」

0・5秒で着いて行こうと決意する優だった。

第四話

ビヤクヤとセリスに促されどうにか歩き出した優だったが、ふとセリスの横にもう一人いる事に気づく。

しかし、瞬間優は後悔する事になる。

残った一人とは、ビヤクヤ以上に恐怖を感じる対象だったからだ。

身の丈は間違いなく2メートル以上、金色の瞳に赤黒い肌、額には1対の出っ張りがあり、それはまさしく「角」だった。

優は思い出す。小さい頃に読んだ「桃太郎」の絵本を。

そう、それは「鬼」と呼ぶに相応しい風貌だったのだ。

「おっおっおっ……！」

「ん？どうした？」

「いや！ちよつとセリス！なに普通にしてんだ！鬼が横に立つてるんだぞ！？」

慌てる優に対して、「何言ってんだ？」という顔をするセリス。

そして「鬼」という単語が出た時点で優の狼狽の意味を理解する。

「ああ、シキの事が。まあ、気にすんなよ、仲間なんだから。

それにこいつは……なあ？シキ？」

まるで気にしていないセリア。

シキと呼ばれた鬼とは言えば、やや挙動不審に優の方を見ながら口を開く。

「あ……主様……よろしくお願いします……」

「喋った！？しかも敬語！？ってか鬼に様付けで呼ばれた！？」

予想もしなかったシキの口調に連続でツッコミを入れる優。

もちろん優の中では敬語で喋る鬼というのはあり得ない事であったし、

2メートルを超す鬼に「主様」などと呼ばれるとは露ほども思っていないかったのだから。

「つつつか元気だな、オイ。そんだけ口がまわれば護衛の必要も無

かったか」

「当たり前だ！こんだけ摩訶不思議な非日常に出会って落ち着いての方が不自然だろが！」

「お、着いた着いた」

「聞けよ！？」

「はっはっは、主殿は肝が座っておられる。さすがと言いますか、やはりあの方が」

選んだだけの事はありますな」

「おい！座ってねえから、こんだけ喚いてんだろ！？大体、虎に感心される俺って何！？」

「主様……お……落ち着いて……」

「お前が言うか！？」

ぎゃーぎゃー喚く優に対し、それぞれ呑気な反応を見せるセリス達。その時、優の目には新たな人物が飛び込んで来たのだった。

第五話

「お待ちしておりました、優様」

さんざん喚いた事もあり、ぐったりした優が声の方を見るとそこには馬車の前に少女が一人。

さらりとしたストレートの長い髪。透き通る様な白い肌をしたその顔には、翡翠色の大きな瞳。小さくも筋の通った鼻の下にはぷくりとした可愛い唇。

どこからどう見ても美少女だ。

セリスも美人ではあるが、それとは方向の違った

少女に優は思わず息を飲む。

だがそれ以上に優は抑えきれない感情を爆発させた。

「につ……につ……人間だあつ！」

不安、恐れ、疲労、肉体的にも精神的も全てがネガティブに向いていたこの状況での僥倖。

優は脇目もふらず少女に向かい、がばりと抱きしめる。

もちろん普段の日常であれば絶対にしない行動ではあったが今の状態は間違いなく非日常であり、優の行動にも同情すべき余地は多分にあった。

「きゃっ……！」

いきなり抱きしめられた少女は顔を赤らめつつも驚きを隠せないでいる。そして、

「ろけつとばーんち」

「おこっ」

横からセリスの見事な右ストレートが炸裂。

「おい、優。いきなり盛るなよ。リアーナがびっくりしてんだらう

が」

「セリス！優様に何をするのです！」

「お、なんだそのまま襲われた方が良かったか？」

「なっ……！はしたない事を言わないで下さい！」

「おいおい。そんな事言ってる横で愛しの優様が白目剥いてんぞ」

剥かせた張本人のセリスは「それがなにか？」という顔で優を顎で指し、

駆け寄ったりアーナは優の体を軽く揺すり呼びかける。

「優様？大丈夫ですか？」

「ん……ここは……あれ？なんで……？」

「良かった。無事の様ですね」

「君は……あっ！」

痛む頭をさすりながらも先ほどの自分の行動を思い出し、優は体を跳ね起こす。

「す、すみませんでした！なんか俺、急に安心して訳わかんなくなっ……」

「良いですよ、優様。むしろこの状況を不思議に思わない方のほうが変ですから」

「あ、そう言ってもらえると……でも本当にすみませんでした」

改めて見ると、その少女の美しさがよくわかる。

優の通っていた学校にはもちろん、テレビでも滅多にお目にかかれない様な

美しさ。しかもいきなり抱きついた自分を優しくフォローしてくれるという

オマケ付き。

「では、この事はもう気になさらないで下さい。それに……優様に抱きしめられて

私も嫌ではありませんでしたし……むしろ嬉しいくらいでした」

そう言って顔を赤らめ、うつむき加減で赤らむ少女に、優は呆気なく心を奪われる。

（いきなり食べられそうになったけど、今は目の前に美少女……しかも）

今時の女子高生なんかとは、雰囲気も言葉遣いも優しさも比べもんになんねえっ……！）

心の中で感動の涙を流す優を見つめながら、リアーナは軽く微笑む。

「大丈夫ですか？もしやお体に何か……どこか痛みますか？」

「あっ、大丈夫です。少し頭がズキズキするけど。そっちこそ

いきなり抱きつかれて……ねえ？ホントすんませんでした」

「ご無事なら安心しました……私の方は大丈夫と言ったはずですよ？
優様なら別に……もし他の男性でしたら、とりあえず四肢を拘束して

眼球の角膜を剥がしつつ、指の爪の間に一本づつ針を……」

「ちょちょちょっ！ちょっと！ストップ！黒すぎっ！怖いわっ！」

前言撤回。

リアーナと呼ばれ、清楚で可憐な少女は微妙に病んでる所がありそうだった。

第六話

「それでは我は先に戻るとしよう。あのお方にも報告せねばならないのでな」

そう言い残し走り出すビヤクヤを見送った一行は、二頭の馬の様な動物が引く

馬車へと乗り込む。御者はシキだが、鬼が馬車の手綱を握る姿はなかなか

シユールだ。

優はそんな事を考えていたが、セリスにいたっては「あー、だりー」などと

言いながら眠りについてしまった。

リアーナと二人きりになり気まずい沈黙の空間が出来上がる。

優がどうやってこの沈黙を壊そうかと思案している間に

その空間はリアーナによって破られる、というよりは、優に気を使わせまいという

リアーナの優しさなのか。

「改めてご挨拶させて頂きます。私はリアーナ、城で巫女を勤めさせて頂いて

おります。お迎えにあがるのが遅れてしまい申し訳ありませんでした」

「いや、別に無事だったから良いんだけど……というか、リアーナさん？

城とか巫女とか言われても良く分からないんだけど。そもそも最初から説明して

くれませんか？分からない事だらけで」

「そうですね……まずはここがどこなのかという事からご説明させて頂きます。

ここはガリウスと呼ばれる世界。5つの大陸が存在すると言われる

世界で、私たちがいるのは

メルキア大陸の南に位置するエステリア王国です」

「ガリウス？エステリア？……なんとなく地球と違うとは思っただけ、まさか本当に

異世界に呼ばれましたー、なんて事じゃないよな……」

「さすが優様、召還された事をご存知とは」

「おいおいおいおい、本気か？いや、呼ばれる意味も分からないけど普通こういうのはフィクションだろ？ゲームか漫画の話だってば」

「ゲームや漫画の世界ではありません。ガリウスは確かに存在しています。」

異世界があると証明出来ない様に、無いとも証明出来ません」

この状況を受け入れるのにはかなり抵抗があるが、リアーナのまっすぐな瞳を見ると、

嘘や冗談の類いだとはとても思えなかった。

「まあ、違う世界だって事を理解したとしてもだ。俺がここに呼ばれた意味が

全く分からないんだけど」

「それは……おそらくあのお方に伺えば解決出来るかと」

あのお方、という単語に優は反応する。

「あのお方？そっぴいえばビヤクヤもそんな事言ってたな。誰なんだ？そいつが俺を呼んだってのか？」

「はい。あのお方の真意は計りかねますが、何故呼ばれたかは分かっています」

「本当か？なら会わせてもらえる？とりあえずこの世界から元の世界に帰らないと」

呼んだ人間がいるなら帰る方法も知っているはず。そう思った優は暗闇の中に希望の光を見つけ出した気がした。

「……………」

「ん？どうした？いきなり黙って」

「あ、いえ。大丈夫です。……とりあえずあのお方にはもうすぐ会

えますよ」

何かひっかかる優だったが、リアーナの「もうすぐ会える」という言葉を聞き、

安堵する。最初はここで食べられて人生を終えるのかと思っていたが、

日常に戻るのなら良い思い出だ。

クラスメイトに「ファンタジーな世界に行ってきた」などと話したら間違いなく可愛そうな子、という扱いを受けるので今回の事はずっと胸の内に

秘めておこうとは思うが。

「優様、見えてきました。あれがエステリアの王都、シルヴァです」
そう告げられて馬車の窓から外を見た優の目に映ったのは
まさしく中世ヨーロッパパ辺りに建てられた様な城と城下町だった。

第七話

エステリア王国シルヴァ。

古くから王都として栄え、メルキア大陸の中では小国ではあるが、南方独特の温暖な気候と、山々に眠る豊富な鉱石資源を元に交易による活性化で治安も悪くはない。

そうリアーナに説明された優は、実際の町並みを確認しその活気に心躍らせていた。

「いやー、こんなに栄えてるとはね。これなら院の皆に少し位は土産でも買って行けるかな？」

「お気に召して頂けましたでしょうか？」

「いや、こりやすごいわ、本気で。城なんかもテレビでしか見た事ないし、こんだけ活気があれば国も潤ってんだろ？」

「ええ、この国の行政を預かる巫女としては嬉しい限りです。

活気が無ければ人は離れていきます。

そうなれば仕事も無くなり治安も悪化、そして人が寄り付かなくなり財政も悪くなる一方ですからね」

「……………」

「どうかされましたか？ 優様」

「いや、ちゃんと考えてるんだなー、と思つて。俺とそんなに年が変わらなそうなのに国を動かしてんだろ？ すごいよな、マジで」

異世界だわ鬼や虎だわ、あげくに十代半ばの少女が、国の大事な役職に

ついている、と聞かされて疑っていた部分もあるが、優は素直に感嘆の

言葉を漏らす。

「そんな、私はまだまだです。皆に助けられてようやく務めを果たせているのですから。」

それにこの国の方達は自分たちの力で暮らせる術を知っています。

城の人間は少し助けただけですし、むしろ民に生かされている位ですから」

「んでも城の皆がいるから、町の人達は安心して商売や生活が出来るんだろ？」

公的な機関はそれだけで抑止力にもなるしな」

「そういつて頂けると幸いです……。優様はお優しいですね」

優としては普通に感じた事を口に出したのだが、リアーナにとっては慰めであり、励ましと感じた様だ。

何やら潤んだ瞳で上目遣いをされると、どうして良いのやら分からなくなる

優だった。

「それでは城に参りましょう。あのお方も待っているでしょうからそれに、これからの事も優様には知っておいて頂かないといけませんし」

一瞬、リアーナの表情に陰りを感じた優だったが、窓から見える市場の風景と

自分が帰る方法を知っているだろう「あのお方」との対面に心が浮ついている

事で、全く気にはしなかった。

「着きましたよ、優様」

衛兵の「開門！」という合図と共に、城門が開かれる。

この時、優はまだ知らなかった。自身をとりまく運命と、その物語に。

そして語られる真実を。

第八話

「お待ちしておりましたぞ、主殿」

城門をくぐった先で、馬車から降りた優達を迎えたのはビヤクヤだった。

周りにはもちろん衛兵がいるが、目の前に喋る虎がいても全く気にした様子が

無い事から、このビヤクヤという虎はシルヴァ城ではそれなりに認知された

生き物なのだろう。

それよりも優は、自分に向けられている周りからの視線が気になつて仕方なかった。

好奇の目もあれば明らかな猜疑の目もある。

いたたまれなくなった優は思わずリアーナに助けを求める。

「なあ……やっぱり俺って場違いじゃないか？視線が痛いんですけど……」

「お気になさらずに……というのは無理かもしれませんが。ただ、彼らを

悪く思わないであげて下さい。あれは愛国心の表れでもあるのですから」

最後の「愛国心」については疑問が残ったものの、ここはリアーナを信じて

着いて行くしか無い、と判断した優はリアーナやセリスの後を怯えながら

着いて行く。そして一行はやがて、玉座が2つ置かれた広間に辿り着く。

そう、まさに優がゲームなどで見た、いわゆる「謁見の間」の様だった。

そこには鎧やローブを纏った、20人程の人間が並んでいた。

彼らも衛兵と同じく、優の方を見ては「あれが……」「いや、しかし確証が……」

などと小さい声で話している。どうにも居心地が悪い。そんな雰囲気を感じ切ったのはリアーナの一言だった。

「お待たせしました。これより奥の間で儀式を執り行いますので、いましばらくお待ち下さい」

その言葉を合図に、ざわついていた者も口を閉ざす。

「ちょ、リアーナ……さん？　なんか、ただならぬ雰囲気になってるっぽいんですけど。」

ちなみに奥の間って？　儀式ってなんなのかな？

「大丈夫です。儀式といってもあのお方のお印を頂くだけですよ」慌てる優に、リアーナが微笑む。

後ろからはセリス、ビヤクヤ、シキの三人も「ご心配にはおよびませんぞ、主殿」

「が……頑張ってください、主様……」「なーに、骨は拾ってやつからよ」と、

やや一名を除いて励ましの言葉をかけていた。

「おい、こら。今、骨がどうとか……」

「空耳でしょう」

「リアーナさん？　今、明らかにセリスが口に出してましたよね？

どという事なんですか。俺は帰りますというかとつと帰らせる頼むまじで」

身の危険を感じずにはいられなかった優は、良い具合に壊れ始めた様だ。

そして、その場から逃げ出そうかと考えた瞬間、先頭を歩くリアーナが立ち止まり

重く厚い扉を開いた。

「さあ、優様。お入り下さい」

「いやだ。絶対帰る。死にたくない！」

「どうやってお帰りになるのです？そもそも、どこへ？」
するりと後ろに回り込まれ、背中を押される。

森での発言を思い出すべきだった。こいつは黒い部分がある少女だったと。

そして有無を言わず扉が閉められ、涙目になる優の前にその存在があつた。

白い人型の霧。

優がここに飛ばされた原因、そして優の過去を知る者。その名はファリエラ。

「来たか…… エステリアの王よ……」

第九話

エステリアの王、と呼ばれた。

その言葉の意味が分からず、優はただ立ち尽くす。

もちろん単語の意味は分かるのだが、どうして自分が王と呼ばれるのかは

理解出来ない。

この部屋にいる他の4人、リアーナやビャクヤに目で助けを求めるが黙ったままだ。

一様に押し黙る状況の中、真っ先に口を開いたのはファリエラだった。

「……………ぷひよっ……………ぷ……………ぷははは！無理じゃ！もう耐えられん！！」

盛大に吹いたが。

「ファリエラ様！」

「うるっさいのう……………おぬしが「ファリエラ様、今日は大事な日でございます。」

くれぐれも地を出さぬ様、お願い致します」とか言うから、耐えたんじゃないぞ？」

「耐えていないじゃありませんか」

「さーて、元の姿に戻るとするかのう」

「きっちりスルーしやがりましたね、ファリエラ様」

ふざけてるのか、と思える口調で喋っていた霧が一瞬でその姿を変化させる。

身長130cm程の少女、ふわりとした金色の髪の毛、栗色の瞳に長い睫毛、

絵本の童話に出てきそうな姿の女の子が、こちらに笑みを浮かべ、

優の前に

現れた。

「初めまして……いや、久しぶり……とも違うか。」

妾の名はファリエラ。エステリアとの契約により、この地を守っておる精霊じゃ」

いや、どう考えても初めましてなんですが。

というか、精霊って何ですか？やっぱリファンタジー？

戸惑う優にファリエラは言葉を続ける。

「ふむ……何も分かっておらぬ様じゃの。リアーナ、優には何も？」

「はい。出来ればファリエラ様に全てをお話いただければ、と思います」

「くっ……まあ、よい。恨まれるのは妾だけで十分じゃからのう。」

優、全てを教えよう。おぬしが何故ここに呼ばれたか、王と呼ばれる理由……

そしておぬしが何者なのかを」

「ちょっ……なんだそれ？なんでこの世界に呼ばれたのかは知りたところだけど、

俺が何者なのか……って、俺は普通の高校生だぞ？」

「そう、おぬしは「あちら」の世界ではただの高校生じゃ。いや、ただの……というには

少しばかり生まれが違うのではないか？両親がおらず、孤児として育ったのじゃろう？」

「……！なんで知ってる？」

「じゃから全てを話そう、と言っておるのじゃ。どうじゃ？知る覚悟はあるか？」

先ほどのふざけた口調から一転、真面目な顔になったファリエラに優は気圧される。

しかし、覚悟も何も優は分からない事だらけだ。情報は少しでも多

い方が良い。

しかも……自分の生まれについて知っている者が目の前にいて、全てを話すと言っている。

ファリエラの言う覚悟、という事について気になった優だったが、そうも言ってられない状況だ。

「わかった。話してくれ……ファリエラさんの知ってる事を全部」

「ファリエラ、で良い。おぬしは妾の大事な友人の忘れ形見でもあるからのう。

他人行儀は好かんよ」

「ちよ、忘れ……！俺の親を知ってるつてのか！？」

「ああ、知っておる。おぬしの母親は妾の初めての友人、そして父親は

この国の前王じゃ」

頭をハンマーで叩かれた様な衝撃を感じた。

今まで、自分を捨てた親の事なんか考えたくもなかった。

物心ついた時から、優には親も兄弟もいなかったし、なにより

孤児院の先生や、同じ様な境遇の子供達が支えてくれた。

辛くなかった、と言えば嘘になるかも知れない。

孤児という事で中傷を受ける事もあったし、奇異の目で見られる事もあった。

それでも優は、何とか挫ける事も無く成長してきた。

それがなんだ？

今になつて父親が異世界の王様？

母親が目の前の子の友人？

ふざけるな、と叫びたかった。それでも叫ばなかったのは、ファリエラの

表情に戸惑ったからだ。

悲しい？悔しい？少なくとも、優はこんな表情を周りの人間がした所を

見た事が無かった。

小さく深呼吸し、優は尋ねる。

「……………どういう事なんだ？詳しく聞かせてくれ……………」

優は覚悟を決めた。

第十話

それは今から20年前の事。

エステリアは、5年前に即位し後に賢王と呼ばれるアイデルの統治の下、

穏やかな日常に包まれていた。

代々エステリアの王と契約し、この地を守る精霊ファリエラはアイデルと共に国境近くの森に来ていた。

そこは精霊にとって安息の場所。木々が生い茂り、大地からの力が精霊を癒してくれる場所だった。

「面倒かけるな？アイデルよ。たまにここに来なければ、妾は姿を保つ事も難しいのでな」

「構わないよ。ファリエラはエステリアの守人であり、僕の友人だ。それにこれも王の務め

だしね」

「なるほど、アイデルは仕事で仕方なく妾に付き添うてくれているのじゃな？」

「捻くれてるなあ」

「ちと、からかいたくなっただけじゃ。気にするな」

無邪気に笑うファリエラに、アイデルは苦笑する。

その時、軽口を叩き合っていた二人は空気の乱れを感じ取った。

「アイデル」

「ああ。何かがいるね……見に行こう」

「油断するでないぞ、妾と違っておぬしは生身。それに今日は衛兵も多くは

連れてきていないのである？」

「ま、旗色が悪い様だったらファリエラに守ってもらうさ。その間にさっさと逃げる」

とても一国の王とは思えない発言だが、それもファリエラを信頼し

ている証だった。

その言葉にフアリエラも少しかり気分を良くする。

警戒しながら進む二人はやがて人影を見つける。

それは人間の女だった。しかも倒れており、かなり衰弱している様だった。

「フアリエラ！」

「ふむ……まあ、焦るな。これなら妾は干渉出来そうじゃ」

アイデルの言いたい事に先回りしたフアリエラが、女に向かい手をかざす。

フリアラの両手を淡い光が包み込み、その光はゆつくりと女の体に入っていく。

しばらくして、目を覚ました女だったが開口一番、

「おなか……すいた……」

などと言つてのけた。

これにはアイデルも苦笑し、女に優しく話しかける。

「大丈夫？こんな物しか無いけど、良かったら食べて？」

その言葉を聞いた女は、先ほどまで倒れていたとは思えないスピードで

跳ね起きた。

「食べ物っ！？どこっ！？」

驚くアイデルの手元にあつた携帯食料と水筒を見た女は、まるでひったくる様に

食料を奪い取り、ものすごい早さで平らげた。

水筒に入った水を喉を鳴らして飲み干した後、女はアイデルとフアリエラに

目を向け、まるで「いたの？」と言わんばかりの表情に変わる。

「あー……、えと……誰？」

「初めまして。僕はアイデル、こっちはフアリエラ……って言うて

も見えないか」

「そりゃあ、当たり前じゃろう。それよりもアイデル、少し位は警戒心と言う物を

持たんといかんぞ？今回はこんな阿呆そうな女だったからまだ良いものの、

行き倒れを演じた間者だったりしたらどうするつもりだったのじゃ？」

「おい」

「うーん……まあ、その時はその時で。この人には悪い雰囲気は無かったし」

「それが駄目じゃと言っておるのに……全くこの王ときたら……。それで？」

この女はどうするのじゃ？まあ、害が無ければ近くの町にでも放っておけば良かる？」

「おいってば」

「うん、でもこんな所で行き倒れつても珍しいと思わない？地元の人間ですら

入らない様な森なのに」

「ふん、大方この精霊の力につられてやってきた馬鹿じゃろうて。大地の力を吸収した

獣の中にはかなりの値がつく物もあるそうじゃからの。まったく、女のくせに。金に目が

くらんだアホ女じゃ、バーカバーカ」

「アホアホ言うなー！！ってか、無視すんなー！！」

「……………」

いきなり叫んだ女に目を丸くする二人。

「な、なによ。何とか言いなさいよ。そっちから喧嘩売って来たんでしょ？」

いいわよ、買ってやるわ。お腹も膨れた事だしね」

膨らましてくれたのは目の前にいるアイデルだったのが。

なおも驚く二人を目の前に女は言葉を重ねる。

「ほらほら、かかってきなさいよー！特にそっちのチビッコ！バカだのアホだの……」

こうなったらお姉さんがお尻ペンペンしてやるんだからねー」

ファイティングポーズをとり、シャドーボクシングで威嚇する。

「しゅっしゅっ」と口で言ってるのはご愛嬌。

「ファリエラ……」

「うむ……」

「なによー、やんないならこっちからいくわよー！」

「ちょ！ちよつと待って！」

「うっさい。まちでできるごびようまえー」

「なに言ってるかわかんないよ！？それにもう切れてない！？」

慌てるアイデルに対して、良く分からない台詞で勝手に盛り上がる女。

そんな二人を眺め、ファリエラが問いかける。

「まさかとは思うが……女、妾が見えるのと申すか？」

「は？当たり前じゃない。何言ってるのよオコチャマ。ってか、あんたに

文句があんのよ、こっちは」

この事実アイデルが更に驚く。

「会話まで！？ねえ、君！ファリエラの言葉が分かるの！？」

「あー、もう！なんだってのよ！あんたらは！馬鹿にしてんの？ね、そうでしょ？

よーし、いっくぞー！くらえ！優美ちゃんの必殺技、あーんぱーんち！」

なんて事はない。パクリな上に、ただの右ストレートだったが、不意打ちの拳は

アイデルの顔面に景気よくめりこむ。

これが後に「精霊の巫女」としてエステリアに名を轟かせる事にな

った女性、
優美とアイデル、そしてファリエラの出会いだった。

第十一話

「これがおぬしの両親の出会いじゃ」

「……なんというか、全てがギャグに思えてきたぜ」

「無理も無い。妾もあんな人間は初めてだった。少なくともこの世界には」

精霊に喧嘩を売る者もおらんし、国王の顔面に拳を打ち込もうなどという者も

おらんからの」

先ほどまで湧いていた怒りも薄らいでしまう程のパワフル。

優は見た事もない母親に呆れてしまう。

しかし今の話を聞いて理解出来ない部分もあった。

「なあ、そもそも俺の母親……優美さんってのは、どうしてこの世界にいたんだ？」

「それは妾も未だに原因がわからんのじゃ。ただ……一つ言える事は優美に治癒を施した時、妾の力をすんなりと受け入れておった。

妾の施しはこの世界の人間なら受け入れられるが、異世界の人間には毒になる可能性も秘めておるのに、じゃ。もともとこちらの世界の住人と思っていた

からのう……後で異世界の者という事を確認したときは笑うしか無かったわ」

「洒落になってないだろ……それにしても原因不明か……確かに俺たちのいた世界でも

神隠し、って言葉がある位だからな……。その類いか？

それにしても、毒になるファリエラの力を異世界から来た優美さんは受け入れられた……」

「うむ。しかも本来は見る事も話す事も出来ない妾と会話をしよった。

もちろん妾の姿を確認した上で、じゃ」

「優美さんにはあらかじめ何かの力がそなわっていた……？ ああ、もう何がなんだか」

「妾の姿を見る事が出来たのは、限られた一部の者だけじゃったからの。」

それぞれの国の王、妾と同じ精霊共、あとは上位の魔物位じゃ。妾にも理解出来ぬ

部分が多すぎたのじゃ」

それまで饒舌だったファリエラが、ふと上を見上げ悲しい瞳になる。まるで天井の向こうに思いを馳せた様に。

「それで？ 出会いは分かったけど、なんで俺が生まれるんだ？ どう考えても

友好的でも、ましてやロマンティックの欠片も無い出会い方だろ」

「まあ、その辺はおいおい話してやろう。それよりも妾の罪を話しておかねばならん。」

あの二人の子である優、おぬしにな。それにおぬしの両親がどうなつたのかも」

「罪」という単語を聞いた優はファリエラのまっすぐな視線に息をのむ。

ゴクリ、と唾を飲み込み、姿勢をただした優にファリエラは話を続ける。

「どこの誰ともわからぬ優美を、アイデルは城に連れ帰った。」

もちろん周りは大反対じゃったよ、独り身の国王がいきなり女を抱えて

帰ってきたからの。

しかし精霊と話が出来るという点を利用し、アイデルは優美を「精霊の申し子」として

宣言した。それで周りの武官や文官も黙るしかなかったのじゃ」

「なんで？ 精霊と話が出来れば偉いのか？」

「聞いておらなかったのか？ 本来見る事も出来ぬ妾と会話まで出来るのじゃ。」

土地を守る精霊とじゃぞ？

その事実を知った後は皆がよってたかつて「巫女様」などと呼び始めよったわ。

尤も、優美自身は良く分かっておらぬ様じゃったかの」

昔を懐かしむ様に、軽く微笑むフリエラ。

「まあ、優美もいきなり異世界に来て多少は不安だった様じゃ。

それを感じ取ったアイデルは、城で働かないかと持ちかけよった。

「精霊の巫女」として

妾の管理を、そしてアイデルの秘書官として」

「ちよつと待った、管理ってどういう事だよ？」

「……ふふつ、そういう所も優美と似ておるわ。精霊は代々その国の王と契約し、

土地を守る。いくつかの国では道具としてしか見ておらん。アイデルはそんな事も

無かったがな」

「……どの世界にも胸くそ悪い奴らはいるんだな。まあ、この国の人間がそういう

奴らじゃなくて良かったぜ」

「優美も同じ事を言っておったよ。何が道具だー！とな。

それにこの城に来て3ヶ月程経った頃じゃ。おおむね好意的になっていた家臣の中にも一人だけ

頭の固い奴がおってな。こんな、どこの馬の骨ともわからん女にも見える精霊などは

実は大した精霊ではないのだろう、などとほざきよった」

「うわ、嫌な奴……まあ、この姿を見ちまうと俺も微妙な気分にあがつ！」

「何か言ったか？」

「いえ……なんでもございません……」

靴の上からとは思えない痛みを感じた優は、足を踏みつけているフリエラに

涙目で返答する。

「ともかくな、嫌みを言われた優美は何と言ったと思う？

あたしはなんて文句を言われようが構わない、ただ、あたしの友達を馬鹿に

するなら容赦しない、と言いよった。友達じゃぞ？土地を守る精霊、人外、道具を

友達だと思ってたんじゃない。まったく……」

「顔が赤いぞフアリエあがつ！」

「学習せんか、馬鹿者」

またも踏みつけられる。

このままではまずい、と思った優が話題を変える。

「それで？お前の罪ってなんだよ？二人はどうなったんだ？」

「うむ……ここからが本題じゃ。妾も覚悟を決めよう」

それは優が見た事も無い両親と真実。

そして悲しい物語だった。

第十二話

アイデルと優美が出会って2年、出会いこそ強烈なものだったが、少しづつ愛情を交わす様になった二人は、自然と結婚という道を選ぶ事となる。

国王の婚姻に、周囲の反対もあるにはあったが、この頃には優美の破天荒でありながら、的確な仕事能力、精霊の巫女としての働き、何より家臣や国民との社交性が優れていた

事により、目立った混乱も無く優美はエステリアの後となる。

本人は「柄じゃない」と言っていたが、アイデルを愛していたし、すでにエステリアに

骨を埋める覚悟も出来ていた。

そして二人は一つの宝物を授かる。

優の事である。

エステリアは世継ぎの誕生により歓喜に包まれた。

国民の誰もが、この三人には幸せになって欲しい、そう願っていた。しかし、それは突然破られる。

ひとつの悲劇によって。

優が誕生して10ヶ月。

アイデルと優美は小さい優を連れて、あの森へと来ていた。

そう、二人が初めて出会ったあの森に。

この日、ファリエラの「充電に行くのじゃー」という要望もあり、それなら優にも森を見せてやろう、という事になったのだった。

「ほーら、ゆうくん。ここでパパとママは初めて会ったんでちゅよー。」

それはそれは、素敵な出会いだったんだから」

「あの衝撃的な対面を「素敵」と呼べる君を改めて尊敬するよ」

「うっさいわねー、男のくせにグダグダと。後でちゃんと謝ったでしょうが」

「あれで！？」「いやー、そっちも喧嘩売ってきたんでしょー」とか言ってたよね！？」

謝られた記憶がないよ？しかもメインはファリエラが悪口言ったからでしょ！？」

「あ、ゆうくん。あそこらへんだよ！ママはあそこで行き倒れちゃったんでちゅよー」

「その華麗なスルーに馴れた僕を褒めてあげたいよ……」

げんなりするアイドルを尻目に優美は、我が道に行く。

そういう所もひっくるめてアイドルは優美を愛していたので、何も言えなかったが。

「そういえばファリエラは？」

「ああ、後で来ると思うよ。先に行つててくれって」

「あんにやる……自分で言い出したくせに……」

「まあまあ、いつもの事だしね」

「くっそう……お得意の「誰にでも優しく困っちゃう病」か……」

「ねえ、なに？その今考えました、みたいな病名。しかも何の病気なんだよ、それ」

「いーえー、アイドル国王陛下は国民の皆さんのアイドルですからねー。」

勘違いさせるのが大変お上手ですし？そりゃ、城下町の踊り子ちゃんにまで優しく

しちゃうから？モテモテでござんすねー」

「いやいやいやいや、全く意味が分からないし」

「分かってないから尚更問題なのよ。いいでちゅかー、ゆうくん。」

ゆうくんは

パパみたいな浮気者になったら駄目でちゅからねー」

「うわあ、明らかな言いがかりなはずなんだけど、どうしてだろう？ 涙が出てくるよ……」

いつもの様に優美の尻に敷かれ、二人は歩き続ける。

そろそろファリエラも来るだろうか、それまでもう少し、この親子水入らずの時間を楽しもう。

アイデルは最愛の伴侶と、抱かれる我が子を見つめ、幸せを噛み締めていた。

その時、静かな森に一つの声が響く。

悲鳴、それも小さな子の悲鳴だ。

「アイデル！」

「優美はここにいるんだ！」

男の自分よりも先に、声のした方向へ駆け出そうとする優美を制し、アイデルは走り出す。

何よりも、生まれて一年にも満たない我が子が心配だ。

森の外に待たせてある衛兵を呼びに行く時間は無い。

アイデルは森の中を走り、声の主を見つける。

まだ4、5歳の女の子が地面に倒れている。その小さな命を無惨に断とうとしている存在。

それは異形の魔物だった。

「なんで魔物が！？ 精霊の加護はどうなっている……！」

ファリエラの力でエステリアには魔物がいないはず。

アイデルは戸惑いを隠せなかったが、それよりも今は女の子を助ける方が先だと

考え、走り出す。その姿を捉えた魔物はアイデルに標的を変えた様だった。

カマキリのような爪を振り下ろされ、受け止めるアイデル。

剣の技術も平均以上だったアイデルだったが、魔物の力はそれ以上に強い。

押されるアイデルはそれでも声を上げる。

「君！早く逃げるんだ！」

少女はその声に反応したが、座ったまま動けないでいる。

腰を抜かしたか、どこかに怪我を負ったか。

その時、一人の人間がアイデルの元に辿り着く。

「優美！何しにきたんだ！君は優と安全な場所へ！」

「待ってられる訳ないじゃない！それに一人で倒せる様な相手なの！？」

「くっ……！しかし、なんでこんな魔物が……優美！今のうちに彼女を！」

「わかった！」

魔物を食い止めているアイデルの言葉に、優美は頷き、少女のもとに優を抱いたまま走り出す。

少女までの距離は10メートル程。

駆け寄る優美が手を伸ばしたその時、魔物が躍動する。

アイデルを弾き飛ばし、その爪は無防備な少女へと向かった。

「！」

しかし魔物の爪が捉えたのは少女では無い。

優と少女を抱きかかえて守る、無防備な優美の背中だった。

「優美……！！」

アイデルは叫ぶ事も出来ない。

その光景を見た瞬間、アイデルの喉は砂漠を一昼夜歩き続けた様に乾き、

心臓と脳が同時に破裂したかと思うくらいに、アイデルの心は真っ白になる。

優美の背中からは鮮血が飛び、返り血を浴びた魔物は狂喜したかの

様に

ギイッ、と不快な声をあげる。

その声を聞いた瞬間、アイデルは今まで感じた事の無い感情をむき出しにした。

それは純粹すぎる程の怒り。

目の前の魔物を殺す。愛しい妻の背に爪を立て、その暖かい血を見て喜ぶ様な

者を生かしておけるものか。答えは、否。

「うあああああ！ウアアっ！あああっ！！」

ゆっくりと倒れる優美を視界の端に写し、雄叫びを上げ魔物に向かっていくアイデル。

守れなかった。自分は愛する人を守る事が出来なかった。

自責の念と怒りと。

二つの感情が渦巻いたアイデルは冷静にはなれなかった。

突進してくるアイデルに向き直り、魔物が爪を振る。

アイデルを捉えた魔物の鎌がアイデルの肩口の肉へと食い込み、そのまま胸まで入る。

完全に致命傷となった傷を見て勝利を確信した魔物だったが、その目には剣を振りかぶる

アイデルが映った。

そして魔物の首が跳ね飛び、その体が崩れ落ちる。

「優美……」

アイデルは地面を這いながら、倒れている優美へとその身を懸命に動かす。

しかし、アイデルの手は優美に届く事は無かった。

エステリア国の誉れ高き賢王、アイデルの命の灯が消えた瞬間だった。

第十三話

後から行く、と言ったファリエラはその日を忘れない。

血だらけで横たわるアイデル姿を。自らの命と引き換えに、優と少女を守りぬいた優美を。

そして、この状況に気づかず呑気に森に向かっていた自分の愚かしさを。

ファリエラがその空気の乱れを感じ、森の中心部に着いた時にはすでにアイデルと魔物が相打ちになった後だった。

自分は精霊だから理解出来ないと思っていたが、いつかアイデルが言っていた

血の気が引く、という感覚はこういう事なのかも知れないと思った。だがファリエラはもう一つの事実に気づく。

「優美！！」

そう、まだ優美は生きている。しかしファリエラには分かってしまった。

それは小さな、本当に小さな命の残り火でしかない事に。

「くっ……！まだじゃ！大丈夫じゃ、優美！」

「……ファリエラ？……優は……？女の子も無事かな？」

「無事じゃ！だからしつかりするのじゃ！」

「……アイデルは……アイデルは？」

「……っ！」

すでに魔物と相打ちになり、絶命しているアイデルの事を聞かれ

ファリエラは戸惑う。その反応を見て優美は理解した。

「そう……駄目だったんだ……」

「優美！」

「ごめんね、ファリエラ……あたしも駄目みたい……」

「今、妾の力を分けてやる！じゃから諦めずに頑張るのじゃ！」

「ううん……自分の体だもん、分かるよ……」

涙が流れた。自分は精霊、涙など流せない、流す訳が無いと思っていたのに。

「優美！優美いつ！」

「あのね……お願いがあるの……聞いてくれる？」

「そんなもの、後でいくらでも聞いてやる！じゃから！じゃからっ

……！」

「優の……優の事……お願いね……」

なんとという人間だろう、とファリエラは思う。自分が死の淵にあるにもかかわらず、

先ほどから自分以外の事ばかり心配しているではないか。

改めてファリエラは、この人間が自分の事を「友」と言ってくれた事に

胸が締め付けられる。

優美の呼吸が粗くなり、その体から生気が抜けて行くのを感じていたファリエラだったが、ふいに優美の体の異変に気づく。

淡い光が辺りを照らし始め、木々もざわめきを増して行く。

「これは……どういう事じゃ？誰が操っておる！」

光は徐々に強くなっていき、優と少女を抱きかかえた優美の体に集まっていき、

その輝きを一段と強くした時、辺りを光で染めてしまう様に弾けた。
「……………っ！」

光が収まった後にファリエラの目の前にあったのは、冷たくなった

優美と、

気を失っている少女だった。

「優美……優美……」

変える事の出来ない現実にはファリエラは嘆くばかり。

だが、優美の最後の言葉を思い出し、さらなる絶望を知る事になった。

ファリエラの瞳には優の姿は映らない。

まるで最初から存在などしていなかった様に。

「……とまあ、これがおぬしの過去であり、両親の出会いと最後じや」

「……………」

「なぜおぬしが今まで優美がいた世界に飛ばされていたのかは、妾にもわからぬ。

あの光が何かしらの原因を持っていると考えるのが妥当じゃが……とにかく妾は

この世界の隅々を探した。しかし、おぬしを見つける事は出来ずにいたのじゃが、

昨日まるで何かが繋がった様に、おぬしの存在を知る事が出来たのじゃ」

「……………理解出来ない話ばかりで、頭ん中が追いつかねえよ」

「……無理も無い。じゃが、これだけは分かってくれ。おぬしの親は決して

おぬしを見捨てたりした訳ではないと。頼む」

唇を噛み、うつむくファリエラの姿を見て優もいたたまれない気持ちになる。

だが、それより自分の置かれた状況や出生の秘密が、優の心に重くのしかかっていく。

「……そういえばさっき言ってたファリエラの罪ってのは何だったんだ？」

「うむ。セリス」

今まで口を閉ざし、話を聞いていたセリスにファリエラは促す。

その目を見てセリスも意味が分かった、という様に腰に下げた短刀を投げる。

受け取ったファリエラはそのまま優に手渡すが、意味の分からない優は

ただファリエラの真意を探る。

「どういう事だ？」

「そのままの意味じゃ。優美とアイデルを死なせた事、おぬしを守れなかった事、

妾の罪は海よりも深く山よりも高い。その刀で妾の首を落とせ。それが妾に出来る

唯一の償いじゃ」

「！？」

「なに、普通の人間なら不可能じゃが、おぬしなら可能じゃ。さあ、はようせい」

「馬鹿いうなよ……出来る訳ねえだろ！？」

「しかし約束も守れず、土地も守れなかった妾だけがおめおめと生きておるのは

今日の日の為。おぬしには妾を断罪する権利があるのじゃ」

そこで再びこの場を沈黙が支配する。優はもちろん、ファリエラも同じ姿勢のまま

動こうとしない。

「ファリエラ様、あなたは優様を苦しめたいのですか？」

「リアーナ、おぬしは黙っておれ。これは妾と優の問題じゃ」

「それが間違いなのです。もし、ファリエラ様が償わねばいけない

のであれば、

その時は私の方が先に首を落とされなければなりません」

「やめんか！リアーナ！」

「どういう事だ？リアーナ？」

二人の会話を聞いていた優は意味が分からず、リアーナに問いかける。

ファリエラは顔を上げ、リアーナを睨みつけている。

「今のお話の中で助けられた少女……つまり、優様のご両親である優美様と

アイデル様が命を落とす原因となった人間……それが私です」

リアーナの発言に優はまた戸惑う。目の前のファリエラはリアーナを睨んだままだ。

「私は……私のせいで優美様とアイデル様はお亡くなりになりました。

私があの日、ふらふらと森の中に入らなければ……私が外に出なければ……」

「リアーナ、おぬしは黙っておれ。二人を守るのは精霊である妾の役目じゃ。

そして守れなかった妾を優は責める権利がある」

「いえ、あの事件は私の責任です。優様、責めるのであれば私を……

…どのような

罰でもお受け致します」

「いいかげんにしてくれ！」

優の怒声が響き渡り、ファリエラとリアーナはその場に固まる。苛立を隠せない優はさらに言葉を続ける。

「ちよっと待ってくれ、二人とも。正直話が唐突すぎて訳分かんね

えんだよ……、

ちよつと整理させてくれないか？まず俺は地球で生まれて育った孤児だと思つてたけど、

実はこの世界……ガリウスの生まれで、父親はこのエステリアの王様、母親は地球から

俺みたいに飛ばされた優美さんって人なんだよな？」

「うむ、優美は確かに「チキュウ」の「ニッポン」で生まれたと言つておつた」

「そうか……んで二人は森で襲われていたリアーナを助ける為に……俺も助ける為に

魔物と戦つて死んだ。その時、俺は地球に飛ばされた……で合つてるか？」

「そうじゃ。原因は精霊の妾にも分からぬがな」

「んで、そんな時の責任がどうのここのつて事で二人は言い争つてる……と」

そこで優は少し考え込む動きを見せ、口を開いた。

「つてか、フアリエラもリアーナも何も悪くねえじゃねえか。つつうかな、

正直言つと会つた事も話した事もない親だからな。実感が湧かないんだよ。

それなのに責めろつて言われてもな……それに話を聞いてりやどう考えても

事故じゃねえか。アンタらを責める事は出来ないだろ」

「しかし！それでは……」

「そうじゃ！妾は償わなければいかんのじゃ！」

「……償い、ってんならもう十分なんじゃないか？アンタらは今まで二人の事を

忘れてなかつた。自分のせいだ、つて責め続けながらな。俺に責めるつもりも無いし、

権利も無いよ」

ファリエラとリアーナは優の言葉をうつむきながら黙って聞いている。

まだ納得はしていない様だったが。そして再び沈黙が訪れようとした時だった。

「はいはい。小難しい話はこれで終わりー。ファリエラもリアーナも、もう良いだろ？」

優もこういつてるんだしよ、それで良いじゃんか。それよりも優をどうするか、だ」

セリスが相変わらずの口調で空気を壊してくれる。

ただ、優には助け舟だったのかセリスの方に目をやり「ありがとう」と口の動きだけで

セリスに感謝を告げる。

「優様……寛大なお心遣い、感謝致します。このご恩は私の命に代えても返させていただきます」

「リアーナさん、それ結局変わってないっす。死んじゃ駄目です」漫画や映画で出てきそうな台詞を放つリアーナに思わず優が突っ込みを入れる。

「妾はまだ納得できんが……優がそう言うのなら従うしかあるまい。なんせ優は妾の契約主じゃからな」

「そうですね……これでこの国も更に良くなりますね、ファリエラ様。」

国民の皆もお二人のお子、となれば諸手を上げて喜ばれます」

「そうかあ？森の中で逃げてるこいつを見たら不安になったぜ、あたしは。」

ほんとにこいつで大丈夫なのかよ？」

先ほどまでおとなしかったファリエラやリアーナと共にセリスが会話を続ける。

しかし黙って聞いている優の耳には、三人が何を言っているのか理解が出来ない。

契約主だの国民が喜ぶだのと話しているが、いったい何の事だろうと問いかける。

「あのー、皆さん？説明して頂けると助かるんですが……。契約だの大丈夫なのかだの、意味が分からないんですけど」

その言葉を聞いてフアリエラがキョトンとした瞳で優を見る。

「何って……おぬしの事だろうが。エステリアの国王であるおぬしのな」

第十四話

「……………なんだって？」

フアリエラの言葉に優は思考を止まらせる。それも無理はない。

いきなり国王様ですなんて言われて、ああそうですかなどと言えるほど柔軟な思考を優は

持っていないのだから。

「聞こえなかったのか？おぬしにはこのエステリアの国王になってもらおうと言っておるのじゃ」

「いや、だからね？全く意味分かんねえんすけど。大体なんで俺が国王なんだよ」

「それは私から説明させて頂きます」

リアーナが一步前に進み出る。

「現在エステリアには王と呼ばれる方はおりません。前王……アイデル様と王妃の優美様が

亡くなられ、次期候補であった優様は行方不明……もちろん、一時エステリアは混乱しましたが、

フアリエラ様と家臣の方々の尽力により平穏を取り戻す事が出来ました。

それでも民は新たな国王を求めています。このエステリアの事を考え、アイデル様と優美様の

意思を継ぐ存在を……。もちろん勝手な事を申し上げているのは承知しています！

それでも……私は優様に国王となってもらいたいのです……」

途中でこらえきれなくなったのか、嗚咽混じりで話すリアーナを見て優の心は軽く締め付けられた。

しかし意を決してリアーナに言葉を返す。

「……………リアーナ。本当は続きがあるんじゃないのか？」

「……………っ！」

まるで心の奥底の闇を指摘された様に優の言葉に対しリアーナは目を見開く。

「だって、おかしいだろ？ここに来る時、町はそこそこ栄えていた。リアーナが行政のトップにいる。

それに話を聞くとファリエラや家臣の城の人達で何とか持ちこたえた国なのに、いくら王子が

生きてたって言っても右も左も分らない子供に期待する事も無いだろ？もちろん、国の人達は

王子が生きてましたー、なんて言ったら喜ぶかも知れないけど、人氣があつたのはアイデルって

王様と優美さんだ。俺に期待してる訳じゃないはずだしな。

俺が国王になる必要は他にある……そうじゃないのか？」

ここまで見てきた事や聞いてきた事を自分なりにまとめ、優は言葉を紡ぐ。

「優、リアーナを責めないでやってくれ。妾がそうして欲しいと申したのじゃ」

リアーナと優の会話にファリエラが入ってくる。

「城の皆や国の民が国王を望んでいるのは本当じゃ。現に家臣の一部はおぬしが生きておる

事を聞いて涙を流す者もおったくらいじゃ。騎士団や国の皆はおぬしの事はまだ聞いておらんがな」

リアーナの言葉が嘘ではなく、本当の事だと強調するファリエラに優は思う。

ああ、この精霊は偉いくせにリアーナの事を、そして自分の事を心配してやがる。

優が傷つかない様に、リアーナが嘘つきだと思われない様に。妙に人間臭い奴だ、と優は考えながら

ファリエラに問う。

「そんで？何か心配事でもあるんだろ？その為に俺が必要になった……そういう事だろ？」

「うむ、その通りじゃ。現在メルキア大陸にあるいくつかの国は平穏を保っておる。

表向きは……な」

「いきなりキナ臭くなってきたな、おい。頼むから戦場に突っ込んでこいつてのは勘弁してくれよ？」

「今の所それは無いはずじゃ。ただな……メルキア大陸の一国、ザグルが不穏な動きをしておるとい

情報が入っているのじゃ。もちろん今すぐ戦争を起こすとか、邪神の復活とかそういう事は無い。

それは精霊である妾を信じよ」

「ザグル……要はその国が喧嘩売ってくるかも知れないから国王を……て事か？」

「そういう気持ちが無い、と言ったら嘘になるんじゃないかな、それ以上

に妾が突き止めた事が

今回の件に関係しておるのじゃ」

「突き止めた事？」

「！？」

ファリエラの発言に驚きを隠せない優。まだまだ実感は湧かないが一応の両親である二人が

もしかしたら故意で殺されたのであれば……おそらく許せないだろうと優は感じていた。

「妾も確証はまだ持てずにおる。じゃから今すぐザグルに戦争を仕掛けてどうこう……という

訳には行かぬがな。それと……これが重要な事じゃが、優。おぬしは元の世界に帰りたいか？」

「リアーナの前で言うのもあれだけど……正直今すぐに帰りてえ。いきなり自分がこの世界で

生まれたんです、国王様です、なんて言われても困るし。それに俺は皆が期待する程、強くなんか

ねえよ。ってか、俺は帰れるのか？そこが一番重要なんだけど」

「優、あまり自分を卑下するでない……まあ、その辺りはその内に分かるじやろ。」

それでな、先ほどの話で原因不明の光がおぬしをチキユウに飛ばした、と言ったじやろ？

おそらくあの光に関する情報が得られればおぬしをチキユウに戻せる可能性は高くなる」

「それとザグルうんぬんが関係してんのか？」

「そうじゃ。ザグルの動きを探っておった妾の眷属の話によると、あの時見た光とそっくりな

ものをザグルで見た、というのじゃ。もちろん確証がある訳では無いが……今はそれに賭けるしかない
あるまい」

「なるほどな……ところでそのザグルってところには直接行けないのか？」

王様がいるんなら話も聞けるんじゃないのか？」

「殺されたいのなら一人で行くが良い。ちなみにザグルとエステリアに国交は無い。」

あそこはメルキア随一の軍事大国じゃからな。しかもほとんどの国に対して歩み寄ろうとは
しておらん」

まるで昔の日本が鎖国をしていた様な感じだろうか？それなら下手に乗り込んでいっても

どうなるか分からない。ここはフアリエラの言葉に従った方が無難だな、と優は思った。

「なら、すぐ帰るのは無理って事か。まあ、話の流れから簡単には帰れなそうだって

思ったけど……しばらくはこっちに厄介になるしかないか」

「おぬしは変な所で度胸が据わっておるのう。普通なら発狂してもおかしくない状況じゃぞ？」

「そんなん言われても。まあ、小さい時から色々あったからな」

褒められてるのか怪しいところだったが、前向きに捉えておこうと思っ優。

「あ、あの……優様？」

先ほどまで涙を流し、ファリエラと優の会話を聞いていたリアーナが申し訳なさそうに

優に話しかける。その表情にもどきり、としてしまっ優だったが。

「ん？どした？」

「えと……その……それで、国王には……」

「ああ、その事なんだけどな。ほんつと悪いんだけど、保留にしておいてくれないか？

俺自身まだ覚悟が決まってないってのもあるし、何よりそんな奴に上に立たれる国の皆が

納得しないだろ」

「そんな事は！皆はきつと優様をお認めになります！というか、ならない者は私が責任持つて」

「ストップ！すとーっぶ！また何かよからぬ事考えてただろ！」

さらりと黒い部分を除かせたリアーナを慌てて静止する。

優は、実はエステリアの中でリアーナが一番の要注意人物なんじゃないかと疑っってしまう。

「あのな、リアーナ。お前の言いたい事も分かるけど、まずは次期候補って事にしといて

くれないか？もちろん行方不明だった王子って事もばらしてくれて構わない。

その方が俺も期待に応えようとプレッシャーがかかるからな」

「それでは……！」

「ああ、一応帰れるまでは王子って事で頑張ってみるわ。途中で皆から見捨てられるっ

可能性もあるけどな」

「せいぜい努力してみせるのじゃぞー」

「おい、その腐れ精霊。口の聞き方に気をつけるよ?」

「いきなり上から見下しおったな……!」

「ふふつ、良いお相手が出来ましたね。ファリエラ様」

「どこをどう見れば……まあ良い。優、これからは何かと辛い思いをさせるかも知れんが

耐えるのじゃぞ? 妾の命はおぬしに助けられた。この身は全ておぬしの好きに扱えい」

「いや、その言い方はどうかと。つつか、そんな起伏の少ない体はちよつとな……」

「リアーナ。今すぐこやつを拷問部屋に連れていけい。生まれた事を後悔させてやるわ!」

むきー、と地団駄を踏むファリエラだったが、小学生くらいの見た目では優の指摘も

もつともだった。そつち方面の趣味を持つ人達から見れば、ど真ん中ストライクな容姿なのだが。

「よっしゃ、話はまとまったみてえだな。つつか眠すぎて死にそうだったぜ」

状況を静観していたセリスが体をコキコキと鳴らしながら歩み寄ってくる。

「なあ、俺の記憶が正しければ完全に寝てた気がするんだが」

「黙れこら。さっそくリコールすんぞ? 王子様」

ニヒルに笑い軽口を返してくるセリス。そこにビャクヤとシキも混ざってくる。

「はっはっは、やはり主殿は胆が据わっておられる。これからはこのビャクヤ、全身全霊をかけ主殿をお守り致しますぞ」

「よ……よろしく……おねがいします……」

「ああ……お前ら……辛かったろ? なんか色々と待たせてごめんなあつ……!」

なぜか分からないが随分と会っていなかった感覚のビャクヤとシキ

に向かい、大粒の涙を流す優。

「主殿！？なんで突然泣き出すのですかな！？しかもそんな哀れみの目でっ！」

「いや……やつと話に出て来れたお前らが不憫で……うつつ」

「意味が分かりませんぞ！」

「それはそれとして。リアーナ、セリス、ビヤクヤ、シキ……それからフアリエラ。

こんな俺だから迷惑もかけると思う。でもこうやって会えたのも何かの縁だ。

これから宜しくな？」

「皆を代表して感謝致します、優様。それと……宜しくお願い致します」

このタイトルの連載休止に関するお詫び

まず、一話分のスペースを使用してこのような事を書く事をお詫びします。

先月の終わり頃からネット小説として、この「王と呼ばれて」の連載を始め、自分でも

驚くくらい多くの方が読んでくださいました。

本当にこんな稚拙な文章の物語を読んで頂いただけでも嬉しい限りです。

しかし、もともと小説が好きで「こんな話が読みたいなあ」と思い、それなら自分で書いてしまえ、という位の軽いスタンスで書き進めていました。

（真面目に執筆している方からはお叱りの言葉を受けそうな心がけですが）

そして今、自分の中で他に書いてみたいプロットができ、そちらも並行してとなると、

間違いないこの「王と呼ばれて」の更新がおろそかになってしまおうと考えています。

他にも理由はいくつかあり、現時点でこれからの登場人物の話に多少なりとも無理が生じて

しまふ事などもあります。（これは私の実力が無いせいですが）

その為、ここで一度「王と呼ばれて」の連載を休止という形にし、いずれプロットが

固まり次第、第二部として登場人物達のこれからを書きたいと思っています。

一度この小説自体をサイトから削除しようかとも考えたのですが、何もお断りせず

いきなり削除する、というのも失礼な話かと思いましたので、この状態で残しておきます。

（もちろんサイトの運営側から削除命令などがきたら消すしか無いですが）

手前勝手な内容で申し訳ありませんが何卒ご容赦下さい。

尚、もう一つの連載「ねこまんま」は今まで通り書き進めていきますので

読んで頂ければ光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1171f/>

王と呼ばれて

2010年10月28日06時52分発行